

日本語におけるアルファベットの語形の変遷

～「V」はなぜ「ブイ」と読まれるのか～

山下 洋子

1. はじめに

アルファベット「A、B、C…Z」は外国語としてだけでなく現代日本語においても広く使われる。例えば、「Aの例は〇〇」などの語として、あるいは「Q&A」「ビタミンC」「Vサイン」などの複合語としても使われる。また、固有名としても使われる。例えば、「ももいろクローバーZ」「ABC-Z」（いずれもアイドルグループ）などである。こうしたアルファベットを使った固有名が新たに出てきてもアルファベットは常識的に読めばよいと考えられるためか、読み方が示されることはほとんどない。実際には「ももいろクローバー」「ゼット・ゼッド・ズイー」「エイ・エー」ピーシー「ゼット・ゼッド・ズイー」などの読み方で迷う。常識的なアルファベットの読み方とはどういうものなのだろうか。筆者の感覚では次のような語形を使うことが多いように思う。

エー、ビー、シー、ディー、イー、エフ、ジー、エイチ（エッチ）、アイ、ジェー（ジェイ）、ケー、エル、エム、エヌ、オー、ピー、キュー、アール、エス、ティー、ユー、ブイ（ビー・ヴィー）、ダブリュー（ダブル）、エックス、ワイ、ゼット（ゼッド）

英語の読み方に近いが、「H」は「エイチ」のほかに「エッチ」、「W」は「ダブリュー」のほかに「ダブル」といった、英語やそのほかの外国語にはない読み方がされることがある。また、「V」は英語に近く言うのであれば「ビー」あるいは「ヴィー」だが、現代日本語としては「ブイ」と読まれることが多い。このことは、NHKが行った世論調査の結果からもわかる（石野（1981））。アルファベットが日本語の中で使われるときに、上記のような語形になるのはなぜなのだろうか。アルファベットの日本語としての読み方を扱った先行研究は少なく、管見の限り拙稿（2017）のみである。そこで、本稿は、アルファベットが日本語の中でどのように変化し、現在に至ったのかを知るために、江戸時代以降に発行された外国語辞典やローマ字資料におけるアルファベットの語形を一覧する。そのうえで、「V」が「ブイ」という語形で使われるようになった理由を考える。

2. 現代日本語で使われるアルファベットの語形

2-1 常識的な読み方—現代の国語辞典に掲載されている語形—

まず、現代日本語でアルファベットがどのように読まれているのかを調べる。

よく使われる語形は1章に示したが、個人の感覚によるものではなく、国語辞典にはどのように掲載されているのかを調べる。A-Zの掲載があるのは『広辞苑』『大辞林』『日本国語大辞典』などの中型、大型の辞典である。その中で、本稿では『広辞苑』を調べる。『広辞苑』は初版発行（1955）から、最新版の第7版（2018）まで、発行が長期にわたっており、語形の変遷を調べるのに適していると考えられるためである。

初版から第7版までのうち、「H」と「V」以外は下記のとおり、各版同じである。

エー、ビー、シー、ディー、イー、エフ、ジー、アイ、ジェー、ケー、エル、エム、エヌ、オー、ピー、キュー、アール、エス、ティー、ユー、ダブリュー、エックス、ワイ、ゼット

一方、「H」と「V」は表1のように変化している。

表1 『広辞苑』のHとVの語形の変化

	版	語形
H	初版（1955）～第5版（1998）	エッチ
	第6版（2008）、第7版（2018）	（主見出し）エッチ、（空見出し）エイチ
V	初版	ヴィ
	第2版（1969）	（主見出し）ヴィー、（空見出し）ブイ
	第3版（1983）～第7版	（主見出し）ブイ、（空見出し）ヴィー

また、「W」について『広辞苑』では変化がないが、「ダブル」という語形を示す国語辞典もある。例えば、『三省堂国語辞典』（第7版。以下、『三国』）は「ダブリュー」を主見出しとして、語釈に「ダブル」の語形も示している。

2-2 学校教育におけるアルファベットの語形

現代の学校教育（ローマ字、英語教育）において、アルファベットの読み方をカタカナで示した資料は見つからない。カタカナで発音を示すことで、教育を受ける子どもたちが、英語と日本語との語形の違いに混乱するという理由で、現代の学校教育では極力カタカナでは教えないようにしているためである（中村（1948）、近畿教育大学国語教育学会（1960））。一方、明治時代から戦後までの間にはローマ字教育のために日本語としてアルファベットをどのように読めばよいかを検討されたことがある。古い例ではローマ字ひろめ会が1885年に次のような語形を提案している（『中央学術雑誌』（5）（1885））。

ア、ベ、チ、デ、エ、フ、ゲ、ハ、イ、ジ、カ、(Lはなし)、マ、ナ、オ、ペ、ク、ラ、サ、タ、ウ、(Vはなし)、ワ、(Xはなし)、ヤ、ゼ

現代のアルファベットの読み方から考えると聞き慣れないものである。これは日本のかなの代わりとして使うのに考えられたものである。すなわち「aiueo」は日本語の母音「あいうえお」の読み方に合わせており、「kstnhmyrw」は「カサタナハマヤラワ」に合わせてい

る。「bdg pz」は濁音、半濁音を作るアルファベットとして母音「e」と組み合わせ、また、日本語の音韻上「t」「d」で表せない「チ」「ジ」は「cj」で表記できることを示している。「lvx」は日本語にはない音韻のため日本語としての読み方は載せていない。

このほか、文部省総務局図書課が『羅馬字書方調査報告』（1900）をまとめている（『官報第5204号』（1900））。これはアルファベットの日本語としての語形を公的に示した唯一のものである。ドイツ語あるいはフランス語に近い語形である。

アー、ベー、チェー、デー、エー、エフ、ゲー、ハー、イー、ジェー、ケー、エル、エム、エン、オー、ペー、クー、ルー、エス、テー、ウー、ヴィー、ワー、エクス、ヤー、ゼット

一方で、ローマ字を教えるのに実質的にはアルファベットの英語読みが用いられているとする資料もある（『最新ローマ字文教授法』（1923））。前述のとおり日本風のアルファベットの読み方などいくつかの提案はされたが、結局、ローマ字の読み方は統一はされなかった。

戦後も引き続きアルファベットの読み方の検討が行われている。『文部省制定ローマ字教育の指針—全文と解説』（1947）には、戦後、ローマ字教育協議会小委員会によって考えられた語形が参考として掲げられている。次のとおりである。

アー、ベー、セー（ツーまたはチェー）、デー、エー、エフ、ゲー、ハー、イー、ヨー（ジェー）、カー、エル、エム、エヌ、オー、ペー、クー、ラー、エス、テー、ウー、ヴィ（ブイ）、ワー、エックス、ヤー、ゼット

戦後になってもドイツ語あるいはフランス語に近い語形が提示されているということに驚かされる。そのほかローマ字教育のための参考書としては『ローマ字読本 AIUEO』（東海学習文化研究会編・参考同出版部・1947）に英語読みに近い形が示されている（後述の表2参照）。

英語教育においてアルファベットの読み方をカタカナで示した例は3章の表2でまとめる。戦後においては、「ABCの歌」の歌詞で下記のようなアルファベットの読み方が見られる。

エイ、ビー、スィー、ディー、イー、エフ、ジー、エチ、アイ、ジェー、ケー、エル、エム、エヌ、オウ、ピー、キュー、アー、エス、ティー、ユー、ヴィー、ダブルユー、エックス、ワイ、ズィー・ゼッド（雑誌『中学英語 1st year』（研究社出版・1952-6））

2-3 マスコミで使われるアルファベットの語形

マスコミはアルファベットの読み方を決めているのだろうか。民放はハンドブックなどを市販しておらず、決まりがあるのかわからないかわからないため、ここではNHKの決まりを調べる。NHKでは1934年から放送用語委員会（当初は「放送用語並びに発音改善調査委員会」。途中で改称があり、現在は「放送用語委員会」、以下「用語委員会」）において、放送で使うことばの決定を行っている。この委員会において戦前にアルファベットを使った語の検討がなされている。1936年に「ABC」の「エービーシー」という語形と「シ」で下がるアクセントを決定した。そのほか、1944年にはドイツのミサイルの「V一号」をどう読むのが検

討されており、「ヴィー（英語よみ）」「ファウ（独逸語よみ）」但し報道では何れも採らず「報復第一号」と言ひ換へる」という決定が行われている。しかし、そのほかのアルファベットの読み方は決定されておらず、石野（1981、p.29）に次のようにある。

外国語の発音はなるべく原音に近くというのがラジオ時代のNHKの方針であり、当時は「NHK」もなるべく [en eit ʃ kei] と発音するようという指導がなされていた。しかし、テレビ時代に入って、画面に出す文字との対応ということが重視されるようになり、外来語・外国語はおおむねカナによって表記されたとおりに発音するのが普通になった。アルファベットの読み方だけを必要以上に原音風にするというのも不自然である。現実にはアルファベットの読み方は、人により多少マチマチになっているのではないかと思う。

現在NHKの資料では、『NHKことばのハンドブック第2版』（NHK出版・2005）に「H」が「エイチ」として立項されており、「HB（エイチビー）」「pH（ピーエイチ）」が用例として示されている。『NHK日本語発音アクセント新辞典』には「X」が「エックス」として立項されている。それ以外のアルファベットについての言及はない。

新聞社・通信社はどうだろうか。現在発売されている新聞社・通信社のハンドブックには、アルファベット略語の一覧は掲載されているが、個別の語の読み方までは示されていない。また、アルファベットの読み方を示したものもない²¹。唯一、新聞社のハンドブックでは、1931年に大阪毎日新聞社から出版された『大阪毎日新聞スタイル・ブック』にアルファベットの読み方が下記のとおり掲載されている。

エイ、ビイ、シイ、ヂイ、イー、エフ、ジー、エイチ、アイ、ジエー、ケー、エル、エム、エヌ、オー、ピー、キュー、アール、エス、チャー、ユー、ヴィ、ダブリユー、エツクス、ワイ、ゼツド

読み方について次のような注意書きがある。

ヴィはヴ・イと一字づゝ離して読まれることは少いが、テイはテ・イ、デイはデ・イという風に別々に読まれるおそれがあるから、テイ、デイはチ、ヂであらはずことにした。

（後略）

この注意書きによって、「ヴィ」と表記されているが、これは「ヴィ（あるいはビ）」と発音することを前提にしたものであることがわかる。

ここまで調べたことから、次のようにまとめられる。

- ・現代の学校教育およびマスコミにおいてアルファベットの語形を統一して決めたり、まとめたりした資料はない。
- ・アルファベットの日本語としての読み方を公的にまとめたのは『羅馬字書方調査報告』（1900）だけである。これは明治時代にローマ字教育のために文部省がまとめたもので、ドイツ語あるいはフランス語に近い読みが示されている。現在広く使われているアルファベットの語形とは大きく異なる。
- ・戦後には「文部省ローマ字教育協議会小委員会」（1946）においてアルファベットの

語形が示されたが、それはほかの言語とまったく異なる、日本式とでも言えるような特殊なもので、一般化することはなかった。

- ・NHKにおいては、戦前は原音に近い読みをするようにされていたが、戦後になり、日本語として一般的な語形が使われるようになった。しかし、この「一般的な語形」というのがどういうものなのかを定めたものはなく、現在の放送用語で単独のアルファベットとして読み方が決められているのは「H」と「X」だけである。NHK以外の新聞社・通信社でもアルファベットの読み方を明記した資料はない。

3. アルファベットの語形の変遷

では、アルファベットは、どのような変遷を経て、日本語として現代のような語形で定着したのだろうか。「国立国会図書館デジタルライブラリー」「早稲田大学古典籍総合データベース」「慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション」を利用し、江戸時代以降の科学の専門書や蘭和辞書、英和辞書、外国語会話集、ローマ字教育資料を調べた。漢字あるいはカタカナで読み方が示されているもののみで、発音記号などで示されたものは取り上げない。その結果は表2-1～表2-4のとおりである。

この一覧表に「ア、ベ、セ」あるいは「デ、エ、フ」とあるのはオランダ語のアルファベットの読み方である。これが1859年の『英米対話捷徑』以降、英語読みの「エ、ビ、シ」「エー、ビー、シー」に変化していることがわかる。なお、『英米対話捷徑』には「ABC」を「エベセ」「アベセ」としている部分もあり、オランダ語のなごりがある。

今回調べたものの多くは外国語と日本語の辞書や会話集である。本稿は、外国語として取り入れたアルファベットが日本語化していく経緯を調べることを目的としており、外国語辞典においてアルファベットをどのようなカタカナで置き換えて日本人に伝えようとしたのかを一覧することにも意義があると考えられる。

表 2-1 アルファベットの読み方の変遷（江戸～昭和）（A～G）

書名	発行年	A	B	C	D	E	F	G
曆象新書 ²²	1798	亜	腓	世	田・デ	央・エ	府・フ	厄
訳鍵	1810	ア	ベ	セ	デ	エ	フ	ゲ
諸厄利亜興学小荃	1811	エ	ビ	シ	ディ	イ	エフ	ゼ
改正増補蛮語箋	1848	ア	ベ	セ	デ	エ	エフ	ゲ
英米対話捷徑	1859	エー	ビー	シー	リー	イー	エフ	ヂー
増訂華英通語	1860	エ	ビー	シー	ヂー	イー	エフ	ジー
連邦志略	1862	野 (エ)	卑 (ビ)	西 (シ)	地 (ヂ)	衣 (イ)	鴨夫 (エフ)	紙 (ジ)

洋楽指針英学部	1867	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ジー
英学捷徑七ツ以呂波	1867	エー	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ジー
英字訓蒙図解	1871	エー	ビー	シー	ヂー	イ	エフ	ジ
英字三体 大日本 国尽	1871	エー	ビー	スィー	デー	イー	エフ	ジー
掌中洋学童子訓	1871	エー	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ジー
異人詞入和洋五体 以呂波 ^{註3}	1872	エー	ビー	スー	テイー	イー	エフ	ジー
改正増補英語箋	1872	エ	ビー	シー	ヂー	イー	エフ	ジー
英和単語図解	1876	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ジー
一語通信	1880	エー	ビー	シー	テー	井ー	エフ	ジー
A B C D 早学横文 字伊呂波	1884	エー	ビー	シイー	ディー	イー	エフ	ジー
ウエプスター氏スベ ルリング英語独学	1885	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ヂー
ウ井ルソン氏第一 リード独案内	1885	エー	ビー	シー	デー	イー	エフ	ジー
A B C 字様 ^{註4}	1885	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ジー
英学捷徑英字七ツ 以呂波	1885	エー	ビー	シー	デー	イー	エフ	ジー
羅馬字早学び	1885	ア	ベ	チ	デ	エ	フ	ゲ
改正再版正則ニュー ナショナルリーダー 第一独修便法	1886	エイ	ビー	シー	ドイー	イー	エフ	ジー
英語独学軌範	1886	エー	ビー	シー	デー	イー	エフ	ジー
正則英語独学	1886	エー	ビー	シー	ディー	イー	イフ	ヂー
正則第一プリマー 独学	1887	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ×	ジー
羅馬字書方調査報告	1900	アー	ベー	チュー	デー	エー	エフ	ゲー
イーストレーキ英 語講義録 ^{註5}	1903	エー	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ジー
諸学實用早学び	1904	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ジー
英語知らずの渡米 者航海中卒業	1905	エイ	ビー	スィー	デー	イ	エフ	ヂー
鉄道員必携実用鉄 道英語会話	1907	エー	ビー	シー	リー	イー	エフ	ヂー
英語発音の原理	1910	エーイ	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ヂイー
海員英語会話自在	1916	エーイ	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ヂー
熟語本位英和中辞 典(斎藤秀三郎) ^{註6}	1924	エーイ	ビイー	スィー	ディー	イー	エフ	ヂー
模範独習 ローマ 字の先生	1924	エー	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ジー

英語自習自在	1926	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ジー
英語初歩より 独学者の手ほどき 講師の紙上教授	1930	エイ	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ヂー
実用英語初歩	1935	エー	ビー	シー	ディー	イー	エフ	ジー
誰にも分かる初級 英語の上達	1937	エイ	ビー	スィー	ディー	イー	エフ	ヂー
国民ローマ字読本	1938	ア	ベ	セ	デ	エ	フ	ゲ
ローマ字読本 A I U E O	1947	エイ	ビー	スィー ^{注7}	ディー	イー	エフ	ヂー
ローマ字教育協議 会小委員会	1947 ^{注8}	アー	バー	セー (ツー、 チャー)	デー	エー	エフ	ゲー
ローマ字読本 ^{注9}	1948	アー	バー	セー	デー	エー	エフ	ゲー

表 2-2 アルファベットの読み方の変遷 (江戸～昭和) (H～N)

書名	発行年	H	I	J	K	L	M	N
曆象新書	1798	海				留	務	宴
訳鍵	1810	ハ	イ	イ	カ	ル	ム	ヌ
諳厄利亜興学小荃	1811	エーチ	アエ	ジイ	ケ	エル	エム	エン
改正増補蛮語箋	1848	ハ	イ	イー	カ	エル	エム	エン
英米対話捷徑	1859	エイチ	アイ	ゼイ	ケー	エル	エム	エン
増訂華英通語	1860	エーチ	アイ	ゼー	ケー	エル	エム	エヌ
連邦志略	1862	咽痴 (エイチ)	噯 (アイ)	遮 (ゼイ)	怯 (ケ)	咽尼 (エル)	厭捫 (エム)	奄翁 (エン) ^{注10}
洋楽指針英学部	1867	ヒー、 エチ	アイ	ぜー (ひらがな)	ケー	エル	エム、 ミー	エン、 ニー
英学捷徑七ツ以呂波	1867	エイッチ	アイ	ゼイ	ケイ	エル	エム	エン
英字訓蒙図解	1871	エッチ	アイ	ゼー	ケイ	エル	エム	エン ^{注11}
英字三体 大日本 国尽	1871	エイチ	アイ	ゼー	ケイ	エル	エム	エン
掌中洋学童子訓	1871	エイッチ	アイ	ゼイ	ケイ	エル	エム	エン
異人詞入和洋五体 以呂波	1872	エイッチ	アイ	ゼイ	ケイ	エル	エム	エン
改正増補英語箋	1872	エッチ	アイ	ゼー	ケー	エル	エム	エン
英和単語図解	1876	エイッチ	エイ	ジエー	ケー	エル	エム	エン
一語通信	1880	エッチ ^{注12}	アイ	ジエー	ケイ	エル	エム	エン
A B C D 早学横文 字伊呂波	1884	エイッチ	アイ	ゼイ	ケイ	エル	エム	エン
ウェブスター氏スベ ルリング英語独学	1885	エイッチ	アイ	ゼー	ケー	エル	エム	エン

ウエルソン氏第一 リード独案内	1885	エツチ	アイ	ジェー	ケー	エル	エム	エヌ
A B C 字様	1885	エイチ	アイ	ジェー	ケー	エル	エム	エン
英学捷徑英字七ツ 以呂波	1885	エイッチ	アイ	ジェー	ケイ	エル	エム	エン
羅馬字早学び	1885	ハ	イ	ジ	カ	-	マ	ナ
改正再版正則ニュー ナショナルリーダー 第一独修便法	1886	エツチ	アイ	ジェー	ケー	エル	エム	エン
英語独学軌範	1886	エツチ	アイ	ゼー	ケー	エル	エム	エヌ
正則英語独学	1886	エツチ	アイ	ゼー	ケー	エル	エム	エン
正則第一プリマー 独学	1887	エツチ	アイ	ゼー	ケー	エル ^o	エム	エン
羅馬字書方調査報告	1900	ハー	イー	ジェー	ケー	エル	エム	エン
イーストレキ英語 講義録	1903	エーチ	アイ	ジェー	ケー	エル ^o	エム	エヌ
諸学實用早学び	1904	エツチ	アイ	ゼー	ケー	エル	エム	エン
英語知らずの渡米 者航海中卒業	1905	エーチ	アイ	ゼー	ケイ	エル	エム	エン
鉄道員必携實用鉄 道英語会話	1907	エツチ	アイ	ゼー	ケー	エル	エム	エン
英語発音の原理	1910	エーイチ	アイ	ヂェーイ	ケーイ	エル ^o	エム	エン
海員英語会話自在	1916	エイチ	アイ	ヂェーイ	ケーイ	エル	エム	エン
熟語本位英和中辞 典 (斎藤秀三郎)	1924	エーイチ	アイ	ヂェーイ	ケーイ	エル (ルの上 に ^o) ^{註13}	エム	エン [ヌ]
模範独習 ローマ 字の先生	1924	エイツチ	アイ	ジエイ	ケイ	エル	エム	エヌ
英語自習自在	1926	エツチ	アイ	ジェー	ケー	エル	エム	エン
英語初歩より 独学者の手ほどき 講師の紙上教授	1930	エイチ	アイ	ヂェイ	ケイ	エル	エム	エヌ
實用英語初歩	1935	エイチ	アイ	ヂェー	ケイ	エル	エム	エン
誰にも分かる初級 英語の上達	1937	エツチ、 エイチ	アイ	ジェー、 ヂェイ	ケイ	エル	エム	エンヌ、 エエヌ
国民ローマ字読本	1938	ハ	イ	ヨ	カ	ル	マ	ナ
ローマ字読本 A I U E O	1947	エイチ	アイ	ヂエイ	ケイ	エル	エム	エヌ
ローマ字教育協議 会小委員会	1947	ハー	イー	ヨー (ジェー)	カー	エル	エム	エヌ
ローマ字読本	1948	ハー	イー	ヨー	カー	エル	エム	エン

表 2-3 アルファベットの読み方の変遷（江戸～昭和）（O～U）

書名	発行年	O	P	Q	R	S	T	U
曆象新書	1798		辟		良			
訳鍵	1810	ヲ	ペ	キユ	ラ	ス	ト	フ。
諳厄利亜興学小荃	1811	ヨー	ピ	キヨ	アル	エス	テイ	ユ
改正増補蛮語箋	1848	ヲ	ペ	キュウ	エラ	エス	テ	ユ
英米対話捷徑	1859	ノー	ピー	キウ	アー	エシ	チー	ユー
増訂華英通語	1860	ヲー	ピー	キュ	アル	エス	チー	ユー
連邦志略	1862	窩 (オ)	披 (ピ)	鳩 (<u>キユ</u>)	爾 (アル)	葉斯 (エス)	梯 (チ)	虞 (ユ)
洋楽指針英学部	1867	オー	ピー	キュー	アル	エス	ティー	ユー
英学捷徑七ツ以呂波	1867	オー	ピー	キウ	アル	エス	ティー	ユー
英字訓蒙図解	1871	オ	ピー	キュー	アル	エス	チ	ユー
英字三体 大日本 国尽	1871	オー	ピー	キウ	アル	エス	ティー	ユー
掌中洋学童子訓	1871	オー	ピー	キウ	アル	エス	ティー	ユー
異人詞入和洋五体 以呂波	1872	ヲー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
改正増補英語箋	1872	ヲ	ピー	キュー	アール	エス	テー	ユー
英和単語図解	1876	オー	ピー	キュー	アール ^{注14}	エス	チー	ユー
一語通信	1880	オー	ピー	キウ	アール	エス	テー	ユー
A B C D 早学横文 字伊呂波	1884	ヲー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
ウェブスター氏スペ リング英語独学	1885	オー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
ウヰルソン氏第一 リード独案内	1885	ヲー	ピー	キュウ	アール	エス	テー	ユー
A B C 字様	1885	オー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
英学捷徑英字七ツ 以呂波	1885	オー	ピー	キウ	アール	エス	テー	ユー
羅馬字早学び	1885	オ	ペ	ク	ラ	サ	タ	ウ
改正再版正則ニュー ナショナルリーダー 第一独修便法	1886	オー	ピー	キュー	アール	エス	トイー	ユー
英語独学軌範	1886	オー	ピー	キュー	アール	エス	テー	ユー
正則英語独学	1886	オー	ピー	キュー	アル	エス	ティー	ユー
正則第一プリマー 独学	1887	ヲー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
羅馬字書方調査報告	1900	オー	パー	クー	ルー	エス	テー	ウー

イーストレキ英語講義録	1903	オー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
諸学實用早学び	1904	ラー	ピー	キュー	アール	エス	テー	ユー
英語知らずの渡米者航海中卒業	1905	オウ	ピ	キュ	アル	エス	チー	ユ
鉄道員必携實用鉄道英語會話	1907	オー	ピー	キュー	アール	エス	チ [°] ー ^{注15}	ユー
英語発音の原理	1910	オーウ	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
海員英語會話自在	1916	オーウ	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
熟語本位英和中辞典（斎藤秀三郎）	1924	オーウ	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
模範独習 ローマ字の先生	1924	オー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
英語自習自在	1926	オー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
英語初歩より独学者の手ほどき講師の紙上教授	1930	オウ	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
實用英語初歩	1935	オー	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
誰にも分かる初級英語の上達	1937	オウ	ピー	キュー、 キュー	アール	エス	ティー	ユー
国民ローマ字読本	1938	オ	ペ	ク	ラ	サ	タ	ウ
ローマ字読本 A I U E O	1947	オウ	ピー	キュー	アール	エス	ティー	ユー
ローマ字教育協議会小委員会	1947	オー	ペー	クー	ラー	エス	テー	ウー
ローマ字読本	1948	オー	ペー	クー	ラー	エス	テー	ウー

表 2-4 アルファベットの読み方の変遷（江戸～昭和）（V～Z）

書名	発行年	V	W	X	Y	Z
曆象新書	1798			丁	芻	
訳鍵	1810	ウ	ウ	クス	エイ	ズ
諳厄利亜興学小荃	1811	ウヒ	トブヨ	エキス	ウワイ	イチセツト
改正増補蛮語箋	1848	ユフ	ドフルドユフ	エッキス	エイ	セイト
英米対話捷徑	1859	フヘー	ダブリヨ	エキシ	ワイ	ジー
増訂華英通語	1860	ヴ _#	ダブルユー	エキス	ウハイ	セツト
連邦志略	1862	非 (フイ)	得歩如 (ダブルウ)	咽各斯 (エキス)	外 (ワイ)	細 (ジイ)

洋楽指針英学部	1867	ヴ井一 ^{注16}	ウー、 ドブリュー	エキス	ワイ	セー、 セット (一部 ひらがな)
英学捷徑七ツ以呂波	1867	ウイー	ダブルユー	エツキス	ワイ	ズイー
英字訓蒙図解	1871	ウ井	ダブルユ	エツキス	ワイ	ゼット
英字三体 大日本 国尽	1871	ウイー	ドブリュー	エツキス	ワイ	ズイ
掌中洋学童子訓	1871	ウイー	ダブルユー	エツキス	ワイ	ズイー
異人詞入和洋五体 以呂波	1872	ウキ一	ドブリュー	エツキス	ワイ	ゼット
改正増補英語箋	1872	ヴ井	ダブルユー	エキス	ウハイ	ズイ
英和単語図解	1876	ウ井一	ダブルユー	エツキス	ワイ	スイー
一語通信	1880	ウヒ	ダブルユ	エキス	ワイ	ゼット
A B C D早学横文 字伊呂波	1884	ヴ井一	ドブリュー	エツキス	ワイ	ズイー
ウェブスター氏スベ ルリング英語独学	1885	ヴイ	ダブルユー	エツキス	ワイ	ズイ
ウ井ルソン氏第一 リード独案内	1885	ヴイ	ダブルユー	エツクス	ワイ	ゼット
A B C 字様	1885	ヴイ	ダブルユー	エツクス	ワイ	ズイー
英学捷徑英字七ツ 以呂波	1885	ヴイー	ダブリュー	エツキス	ワイ	ズイー
羅馬字早学び	1885	ー	ワ	ー	ヤ	ゼ
改正再版正則ニュー ナショナルリーダー 第一独修便法	1886	ヴイー	ダブルユー	エツクス	ワイ	ゼット
英語独学軌範	1886	ヴイ	ダブル	エツキス	ワイ	ズイ
正則英語独学	1886	ヴイー	ダブルユー	エツクス	ワイ	ズイ
正則第一プリマー 独学	1887	ヴイー	ダブルユー	エツクス	ワイ	ズイ
羅馬字書方調査報告	1900	ヴイー	ワー	エキス	ヤー	ゼット
イーストレキ英語 講義録	1903	ヴイー	ダブルユー	エツキス	ワイ	ゼット
諸学實用早学び	1904	ヴイ	ダブリウ	エツキス	ワイ	セット
英語知らずの渡米 者航海中卒業	1905	ヴイ	ダブルユ	エツクス	ワイ	ズイ (英人 ハZヲ (ゼ ット) ト発 音シ 米人 ハ (ズイ) ト発音ス)

鉄道員必携実用鉄 道英語会話	1907	ヴイ ^{注17}	ダブルユ	エツキス	ワイ	ズイ、 ゼット
英語発音の原理	1910	ヴィー ^{注18}	ダブル [°] 、 ユ	エックス	ワイ	ズイー或は ズエッド
海員英語会話自在	1916	ヴィー	ダブリュー	エツキス	ワイ	ズイー、 ゼット
熟語本位英和中辞 典（斎藤秀三郎）	1924	ヴィー	ダブルユ (ルの上に [^])	エックス	ワイ	ゼッド(英)、 ズイー(米)
模範独習 ローマ 字の先生	1924	ヴィー	ダブルユ	エツクス	ワイ	ゼット、 ズイー
英語自習自在	1926	ヴィ	ダブリュー	エツキス	ワイ	ゼット、 ズイー
英語初歩より 独学者の手ほどき 講師の紙上教授	1930	キ [°] ー	ダブルユ	エクス	ワイ	ゼド、 ズイー
実用英語初歩	1935	ヴイ	ダヴリュー	エツクス	ワイ	ゼット
誰にも分かる初級 英語の上達	1937	ヴ井ー	ダブルユ	エックス	ワイ	ズイー
国民ローマ字読本	1938	キ	ワ	キ	ヤ	ゼ
ローマ字読本 A I U E O	1947	ヴィー	ダブリュー	エックス	ワイ	ゼット
ローマ字教育協議 会小委員会	1947	ヴィ(ブイ)	ワー	エツキス	ヤー	ゼット
ローマ字読本	1948	ブイ	ワー	エツキス	ヤー	ゼット

一覧すると、ローマ字教育のための資料は別として、「A」「K」「O」は連母音か長母音かでゆれがあるものの、『英米対話捷徑』(1859)以降、現代の日本語で一般的に使われる「エー(エイ)」「ケー(ケイ)」「オー(オウ)」が使われてきたことがわかる。そのほか、「B」「E」「F」「I」「L」「M」「P」「S」「U」については語形のゆれはない。資料ごとの違いが大きいものは「H」「V」「W」である。また「N」は、現代の国語辞典の掲載では語形にゆれはなく「エヌ」で安定しているが、この一覧を見ると、主に「エン」が使われていることがわかる。このように戦後になるまでアルファベットの語形は安定していなかった。

加えて、明治時代に発行された国語辞典にアルファベットが立項されているのかを調べた^{注19}。『日本大辞書』(1892)に「アルハベット」という語で立項があり、語釈に「エ、ビ、シ」とある。そのほか、『ことばの泉』(1908)には「X」が「エツキス」の語形で掲載されている。『俗語辞海』(1909)にも「X」が立項されており、「えっきす」「えっくす」で掲載されている。しかし、アルファベット全体が掲載されたものはない。

4. 「V」はなぜ「ブイ」と読まれるのか

最後に、3章の一覧において特に資料ごとの違いが大きかった「V」についてまとめ、「ブイ」という語形が定着したのにはどういう理由があるのかを検討する。日本語の音韻には[v]はなく、「バ、ビ、ブ、ベ、ボ」と同様に発音されるのが一般的である。表2-4に示したとおり、こうした日本語にない音韻をカタカナで示すためにくふうされている。

当初は「ウヒ」「ウイ」など「ウ」を使って表記する形で取り入れられている。このように「V」の発音を「ウ」を使って書き表す用例は『一読三嘆当世書生気質』の初版の外來語にも使われている（山下（2019））。例えば「variety」が「ウバライヤテイ」と表記されるなどの例である。

福沢諭吉によってまとめられた『増訂華英通語』から「ヴ」の表記が現れる。「ヴ」の表記について、福沢は『福沢全書緒言』（1897）に次のように書いている。

安政五年余が江戸に來りて初めて出版したるは華英通語なり是れは翻譯と云ふ可き程のものにも非ず原書の横文字に仮名を附けたりまでにして事固より易し唯原書のVの字を正音に近からしめんと欲し試にウワの仮名に濁点を附けてヴブと記したるは当時思付の新案と云ふ可きのみ（略）

「フ」を使っているものもある、『英米対話捷徑』『連邦志略』である。『改正増補蛮語箋』の「ユフ」はオランダ語の読み方に近いものである。

現在広く使われている「ブイ」と同じ表記は「ローマ字教育教育協議会」で提案されている。この「ブイ」がどこからきたのかだが、例えば『英語発音の原理』（1910）は「此の字は屢々「ビー」若しくは「ブイ」と呼ばれる」（p. 21）と説明している。1910年の段階で「V」がすでに「ブイ」と読まれていたことがわかる。このように「ブイ」は日本語化した語形として明治末から大正にかけて一般化しており、こうした一般化の状況から戦後のローマ字教育では「ブイ」が提案されたのだろう。

では、なぜ「ブイ」になったのだろうか。表2-4には「ヴィー」「ヴィ」のほか「ヴィ」の表記が見られる。この表記を日本語的に「ブイ」と読み、これが定着したのではないだろうか。

「ブイ」が一般的になったのがいつごろなのかははっきりしない。前に述べたとおり、『英語発音の原理』（1910）の段階では、すでに「ブイ」と読まれていたことようだが、実際の用例が確認できない。新聞では、読みがなをつけずに使う例が多いことから実際の読み方はわからない。「ヨミダス歴史館」を使い、読売新聞に掲載されている「V」を含む語の読み方を調べたが、「V」に読み方が示されている例は1958年の広告に「V ブイ毛生トニック」「V ブイラボラトリイ」という文言がある1例のみである。なお、読売新聞で「Vサイン」など「V」を使った語が最初に現れるのは、1941年7月25日に「V字運動」としてである。読み方は示されていない。雑誌記事索引データベース「ごっさくプラス」においては「V字」を

調べると、1915年の『造船協会雑纂』に「V字形」が出ているが読み方はわからない。そのほか、「日本語歴史コーパス(CHJ)」や「帝国議国会議録検索システム」「国会会議録検索システム」では「V字」「Vサイン」などの語は出てこない。

有識者が「V」の読み方について述べたものに柴田(1988)がある。柴田(1988)は「NHKのコールサインは、大阪第一放送がJOBK、函館第一放送がJOVKである。だから放送の場では、BとVをはっきり発音し分けなければならない」と述べている。コールサインのアルファベットについて「B」は「ビー」、「V」は「ヴィー」で発音を分けなければいけないと考えているということである。コールサインは無電局・放送局の電波につけられた呼び出し符号のことで、放送では、放送休止前や再開時などに定期的に「JO」から始まるアルファベットが読み上げられる(例：東京のNHKの場合は「JOAK」、NHK大阪放送局の場合は「JOBK」など、各放送局によってアルファベットが割り当てられている)。著者の柴田武は1966年から1997年までNHK放送用語委員会委員をつとめており、NHKにおける放送のことばにもくわしいはずである。コールサインの読み方を、戦前のNHKでは、英語の原音に近い発音で読むことを目指していたが、個別のアルファベットについて明記した資料はなく、現代の放送でも読み方の決まりはない^{ie20}。YouTubeを使いコールサインの発音を確認したところ、「JOVK」は「ブイ」と読んでいた。1980年代にはコールサインでこれを「ヴィー」と読んでおり、柴田の指摘になったのだろうか。今回調べた中では、そのことを裏付ける資料は見当たらなかった。

「ブイ」の語形が国語辞典に反映されるのはずっとあとである。前に述べたとおり『広辞苑』では1969年発行の2版から「ブイ」の語形が空見出しとして示されている。また、1980年代には同じく『広辞苑』の立項が「ヴィー」から「ブイ」のみに変更される。「ヴィ」「ヴィー」の表記により、「ブイ」「ブイー」と誤読されたものが一般化した。遅くとも明治時代後期には「ブイ」と読まれることが多かった。これがローマ字教育でも使われるようになった。有識者の認識や辞書への反映はずっと遅れ、1980年前後に「ブイ」がより一般語化したということではないだろうか。この語形の転換時期の検討は、今後の課題としたい。

ここまで調べたことから、「V」については次のようなことが言える。

- ・アルファベットの「V」は英語では [vi:] と発音される。日本語にない音韻をカタカナ表記するためにくふうがされた。福沢諭吉は『増訂華英通語』(1860)において「ヴ」を使い「ヴ井」と表記した。
- ・英和辞典や会話集、ローマ字教育資料では、さまざまな表記で示されたが、「イ」を小書きする「ヴィ」「ヴィー」や「イ」を小書きしない「ブイ」「ブイー」の表記が多く使われた。
- ・「ブイ」の語形は明治後期にはすでに一般的に使われていたようだ。英和辞典などの「ヴィ」を文字のとおり読んだことによって「ブイ」の語形になったのではないだろうか。ローマ字教育では日本風の読み方として「ブイ」を活用した。ただし、「ブイ」と読むように決定した経緯はない。

- ・1980年代に有識者が「V」の読み方を「B」と区別しなければいけないと指摘していることと、辞書の掲載がこの時期以降「ブイ」に変更になることから、「V」の語形が「ブイ」として固定したのは、さほど古くはないことである。

さて、現在でも固有名を中心に「ヴィー（発音は「ビー」とも）」と読むことがある。

「CDTV」（番組名）→ [カウントダウンティービー]

「ETV 特集」（番組名）→ [イーティービートクシュール]

「V ファーレン」（長崎・J2のサッカーチーム）→ [ビファーレン]

例えば、「V ファーレン」は、アルファベットで書かれているだけであり、とっさにこの文字を見たときには「ブイ」と読んでしまいそうだ。「V ファーレン」の公式YouTubeの番組を見ると、「V ファーレンのメンバーのVめし」というコメントがあり、「ビファーレン」[ブイメシ]とある。同じ「V」の表記で「ビ」と「ブイ」が並ぶことになり、こうした語形の判断は難しい。また、「CATV」「DVD」「VTR」などは、現在、多くの国語辞典では「ブイ」の語形で掲載されているが、実際の発音を聞いてみると「ヴィー（またはビー）」とも発音されていることがある。このように「V」の発音は現在でもゆれがあり、読み方に迷う。

5. まとめ

アルファベットが外来語として現代使われている語形になった経緯を調べ、最後に「V」について、語形の変化の理由を考えた。日本語としてのアルファベットの読み方を決めたことはなく、だんだんと一定の語形が定着していき、そうした語形が現代の国語辞典にも反映されていることがわかった。また、現代でも「V」が「ブイ」としてのみ読まれるわけではなく「ヴィー（ビー）」とのゆれが生じることもあることを最後に述べた。

「V」について、明治時代の終わりごろから大正時代のはじめごろには「ブイ」と読まれていたことはわかったが、いつごろからこの読み方が行われていたのかははっきりしなかった。この点については今後の研究課題としたい。「V」以外のアルファベットにも語形が変化しているものがある。特に、「N」は、現在では「エヌ」で安定しているものの、英和辞典では「エン」が多く使われている。これが「エヌ」として安定した経緯など、「V」以外の語形の変化についても検討していきたい。

注1：『新聞用語集（2007年版）』（新聞協会）、『NIKKEI用語の手引2011年版』、『産経ハンドブック 平成24年版』、『朝日新聞の用語の手引 新版』（2015）、『最新用字用語ブック第7版』（時事通信社・2016）、『記者ハンドブック第13版』（共同通信社・2016）、『毎日新聞用語集（2019年版）』、『読売新聞用字用語の手引第6版』（2020）の掲載状況を調べた。

注2：国立国会図書館デジタルコレクション『文明源流叢書』に収録の『暦象新書』の中で、漢字にアルファベットの読みがながつけられているものを抜き出した。

- 注3：大文字と小文字とでカタカナで示された語形が異なる。一覧には大文字の語形を示した。小文字は「c」に「スイー」、「d」は「ディー」、「g」は「ジイ」、「h」は「エッチ」、「o」は「オー」、「v」は「ウイ」である。
- 注4：本のタイトル『ABC字様』には「エビシ」と読みがながつけられている。本文の「B」は「ヒー」とあり、濁点がない。
- 注5：「仮名の付け方」(p. 4)において次のようにある(())は、筆者が理解補助のために追記した。「日本語になき音が英語には沢山あって、之に(仮名を)付ける為に全く異った或は類似的の仮名を付けるものがある。此が抑も間違の基であるから吾が最苦心した処で稍僭越の嫌はあるが吾は新しく仮名を作った」。説明はないもののこの資料には「アー^ル」「ダブル^{ユー}」などの表記があるが、こうした苦心の結果である。
- 注6：『熟語本位英和中辞典(斎藤秀三郎)』には1918年発行のものもあるが、国立国会図書館デジタルコレクションの保存のものは、一部欠落があるため、ここでは取り上げなかった。欠落のため「H」を確認することができなかったが、そのほかは1924年版と同じ語形である。
- 注7：本文には「スイー」の表記もある。
- 注8：日下部(1980)には1946年の文部省ローマ字教育協議会小委員会でまとめた呼び方とあるが、本稿において確認できたのは『文部省制定ローマ字教育の指針—全文と解説』(1947)であるため、表には1947年の資料として採用した。
- 注9：ローマ字で書かれた資料であり、アルファベットの読み方もローマ字で書かれているが、表にはカタカナに置き換えて掲載した。
- 注10：『連邦志略』のアルファベットの記述のうち、「N」「Q」「V」「Y」のカタカナ表記に横線がつけられている。本稿ではそれを「エン」「キユ」「フイ」「ウイ」と記した。これ以外の説明がないためわからないが、2拍ではなく1拍で発音するということだろうか。
- 注11：大文字と小文字とでカタカナの語形が異なるものがある。「N」は大文字では「エン」だが、小文字では「エン」である。「エル」に合わせて、表には「エン」を示した。なお、「エフ」と「エム」は「エ」は使われていない。「P」は、大文字には「ピー」とあるが、小文字は「ピー」である。「ビー」は誤植と考え「ピー」を示しておく。
- 注12：小文字には「h」に「エイチ」、「u」に「ユウ」のカタカナ表記がつけられている。
- 注13：「L」や「W」にある「ル」について、「L」の項目に次のような注意書きがある。「本邦には之に相当する音無きを以てラ行の変体(ラ^リル^レロ)を以て之を示す。」なお、同じように日本語に相当する音がない「V」についてはこうした説明はない。
- 注14：「アー^{ール}」と長音が2つ並んでいる表記が使われている。
- 注15：「tは(チ)にもあらず(テ)にもあらず(チー)と(テー)の間を云ふ心持ち即ち(チ[°])の如く読むべし」と説明がある。
- 注16：「V」の発音について次のような説明がある。「VW 二字ノ音。我ガワ井ウエヲニ近ケレドモ。其声重(オモ)クシテ。稍バビブベボニ似タリ。故ニワ井^ヴエ^ヲ。或ハヴ^ッヴ^ヰヴ^ヱヴ^ヰノ仮名ヲ用フルアリ」。

注17：「v は（ブイ）にあらず（ウイ）にあらず（ヴイ）と読む心持ちに発音すべし」とある。

注18：発音の説明に「此の字は屢々「ビー」若しくは「ブイ」と呼ばれるが、此等は共に誤りである」とある。

注19：『言海』（1889）、『日本大辞書』（1892）、『ことばの泉』（1908）、『俗語辞海』（1909）、『辞林』（1911）を調べた。

注20：『調査月報』（1929. 1）付録の東北支部「アナウンサー参考難解地名人名字彙」に、仙台放送局のコールサイン「JOHK」の発音についてくわしく記されている。山下（2017）p. 109参照。

参考文献

石野博史（1981）「『順風満帆』をどう読みますか—有識者アンケート（第2回）の調査結果—」『文研月報』31-8（通巻363号）

近畿教育大学国語教育学会編（1960）『小学校国語科教育概説』明治図書出版

日下部文夫（1980）「アルファベット」『国語学大辞典』東京堂出版

柴田武（1988）『生きている日本語 方言探索』講談社学術文庫

中村通夫（1948）『ローマ字教育の指導』川田書房

山下洋子（2017）「外来語としての「アルファベット」の発音（第1413回放送用語委員会（東京）2017年2月24日）」『放送研究と調査』67-6

山下洋子（2019）「『一読三歎当世書生気質』に使われている外来語—「初版」と「選集版」との外来語の語形変化を中心に—」『立教大学大学院日本文学論叢19』

（やましたようこ 大学院後期課程在學生）